

ボストン公衆衛生を学ぶツアー

Boston

3/14~3/19

- ・山口雄大（4年、看護学コース）
- ・野崎貴成（4年、健康科学コース）
- ・眞鍋朋子（4年、健康科学コース）
- ・西山里美（3年、健康科学コース）
- ・吉田達見（2年）
- ・引率教員：近藤尚己（保健社会学教室）

渡航先での活動内容

- ・Harvard大学SPHで武見プログラムの方々とのセミナー
- ・Harvard大学の医療経済学教室訪問
- ・ボストン近郊における労働者の健康格差対策に関するフィールドツアー
- ・ボストン大学で健康格差問題に関するセミナー
- ・Boston Medical Centerなど医療施設見学

目的を達成できたか

- 今回の研修で学んだこと:
- ・日本の大学と海外の大学の違い(施設・教員・生徒・部署の充実度など)
 - ・特徴ある地域の健康問題や健康政策の現状(移民労働者が多い、医療施設が集中している等)
- 短い期間ではあったが、アメリカにおける公衆衛生の現状や実践について学ぶことができた。大学見学の経験も併せて、将来の研究や進学先選択の幅が広がった
- 次の目的: 他の地域も訪れ、各地での健康問題や健康政策の違いを学ぶ



ボストン近郊ローレンス市のフィールドワークにて



Harvard SPHにて

グローバルな視点とは何か

- ・他国の先例から学ぶ必要 → 日本の健康問題の分析、対策に生かすことができる
 - ・アメリカの多様性: 生活習慣などの文化・抱える問題が個人・場所によって異なる
- 健康政策を策定するにあたり、各自のニーズを勘案することが必要
格差が拡大しつつある日本でも、海外の調査方法など成功事例を積極的に取り入れるべき

将来の進路決定へどう影響したか

- ・海外経験の利点: 日本の問題を相対化して分析する視点や、グローバル化によって生じる問題に取り組む能力を得ることができる。
- ・海外に行く機会: 留学、大学院進学、ポスドクなど様々
- ・語学: ツールとしてある程度は必須。ただし語学を理由に留学をためらう必要はない

→いつでも海外で活躍することが可能。早い時期から海外も視野に入れて準備しておくことで、将来の進路の幅が広がる

目的以外に学んだ点、反省点

- 学んだ点:
- ・地域間の健康格差を直接見ることで、研修前は漠然としていた問題意識を具体化することができた。
- 反省点:
- ・より活発な意見交換や正確な理解のために、もう少し英語力があると良かった。

後輩へのアドバイス

- ・渡航準備について:
治安レベルや緊急時の対応について調べておく。生活用品などは日本で買っておく方が良い。Wifiなど通信手段はあった方が無難。
- ・現地での行動について:
交通手段についてはある程度調べておき、時間に余裕をもって行動した方が良い。
- ・言語について:
分からないときは聞き返す。会話を理解するために、リスニング力を特に鍛えておくとよい。緊張しすぎずに積極的にコミュニケーションをとる。日常会話の頻出表現はある程度覚えておく。

研修支援制度に望むこと

- ・期間がもう少し長かったり、航空費やホテル代を削減できたりすると、研修内容をより充実させられるかもしれない。
- ・海外経験の少ない生徒や目的意識がまだはっきりしていない生徒には、ツアーの内容があらかじめ組まれている方が参加しやすい。
- ・今後、後輩が研修経験者から話を聞く機会が設けられると良い。